THE JAPAN AGRICULTURAL NEWS
日本農業新聞
発行所　日本農業新聞
〒110-8722 東京都台東区秋葉原2番3号
www.agrinews.co.jp
2021年（令和3年）
8 12
木曜日

「密苗」×ペースト肥料

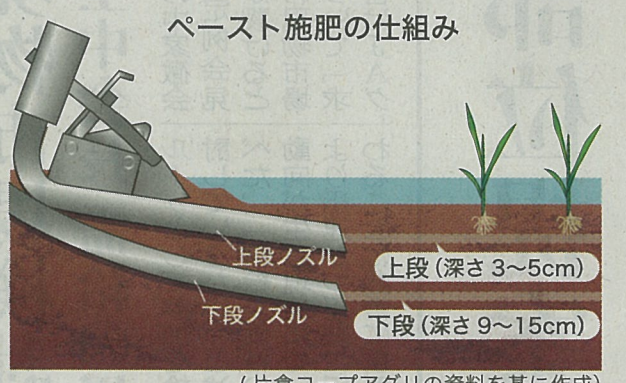
田植え 重量物6割減

省力技術拡大 全国300ヘクタール

肥料メーカーの片倉コープアグリと石川県野々市市の農業法人ぶった農産は、ペースト肥料と「密苗」を組み合わせた水稲の省力技術の実証で、苗や肥料など農家が運ぶ重量物を6割以上減らした。水田や機械の大型化で補給する苗や肥料は多く、重くなっており、作業負担の軽減に役立つ。2021年に、実証を兼ねた省力技術の実施面積は全国約300ヘクタールに拡大し、普及が加速している。

大型規格のペースト肥料は、ポンプで施肥機付き田植え機に補給でき、粒状肥料のように運んで補給する手間がない。元肥の浅い層（上段）と、遅く効いて追肥として働く深層（下段）の2層に施肥する。「密苗」は、苗箱に多くの種もみをまき、1箱の苗数を増やし、苗箱を半減させる技術だ。

ペースト施肥の仕組み



（片倉コープアグリの資料を基に作成）

データは、20年度に85・5ヘクタールで実証した結果をまとめた。従来の方法では、10アール換算で慣行苗112・2キロ、粒状肥料53・8キロ、合計166キロを運搬した。一方、ペースト施肥と密苗の組み合わせでは肥料の運搬がなくなり、重量物は、苗箱のみの61・7キロと従来の37%に減った。苗箱も従来より削減できた。

苗や肥料補給にかかる時間も、慣行に比べ1割減らせた。収量は「コシヒカリ」で10アール571キロで、慣行を上回った。

こうした結果を受け21年は実証が各地で加速している。専用のペースト施肥機付き田植え機が必要となるため、同社がデモ機を8台用意し、各地の農家実証を後押し。東北から九州まで、17県50カ所以上に広まった。ペースト肥料は市販されており、対応する田植え機があれば取り組むことができる。

同社は「大型規格のタンク品であれば肥料袋のごみも出ず、またポンプで肥料補給でき田植え作業が楽になる。大規模生産者を中心にニーズが高まっている」と説明する。